恩膳遺跡

昭和62年度詳細分布調査報告書

1988.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1　○印が恩膳遺跡

序

このたび恩膳遺跡詳細分布調査報告書を刊行することとなりました。本遺跡は、縄文時代の遺跡の宝庫といわれる八ケ岳西麓に所在し、「諏訪史第1巻（大正13年刊行）」に記載されている原村でも有数の遺跡であります。

したがって、このたびの分布調査にあたっては、特に慎重に対処することとし、県教育委員会の御指導を得ながら数次にわたる保護協議を行いました。

そして、昭和62年6月には「恩膳遺跡調査会」を設置し、調査会に「恩膳遺跡調査指導委員会」と「恩膳遺跡調査団」を設け、調査は調査指導委員会の御指導を得ながら実施いたしました。

本報告書の発刊にあたり、御多忙のところ終始御指導、御尽力いただいた県教育委員会、団長の戸沢先生はじめ調査団のかたがた、調査会の皆様、そして本調査に御理解と御協力を賜わった原村農業協同組合に感謝と御礼を申しあげ序といたします。

昭和63年3月20日

原村教育委員会

教育長　平林　太尾

例　言

1．本報告は、長野県諏訪郡原村八ツ手に所在する恩膳遺跡の詳細分布調査報告書である。

2．発掘調査は、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、恩膳遺跡調査会を編成し、調査会には調査指導委員会と調査団を置き昭和62年6月17日から7月3日にかけて実施した。整理作業は、7月6日から63年2月16日まで行なった。

3．現場における遺構実測と記録・写真撮影は小杉　康・阿部芳郎・小菅将夫・鶴田典昭・相馬生奈子・平出一治・伊藤　証・平林とし美、土器の実測・拓本・トレースは小杉・相馬・平林、石器の実測・トレースは小菅・鶴田、執筆は小杉・阿部・小菅・鶴田・相馬・平出・伊藤・平林が話合いのもとに行なった。

4．本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査資料には、24の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事笹沢　浩・太田喜幸・小林秀夫・芦部公一の諸氏をはじめ多くの方から御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　次

序
例　言
目　次
1　発掘調査に至る経過……1
2　発掘調査の経過……1
3　遺跡の立地環境……3
4　調査方法と成果……4
(1)　分布調査――遺跡のひろがりと遺物の集中区域
(2)　ボーリング調査――配石遺構と住居址群との確認
(3)　試掘調査――遺構の確認とその性格の把握
5　ま　と　め
恩膳遺跡調査会名簿

1　発掘調査に至る経過

恩膳遺跡（原村遺跡番号24）は、大正13年刊行の『諏訪史　第１巻』に記載のみられる原村屈指の大遺跡である。

そこに、ライスセンターの建設が計画され、原村農業協同組合から昭和61年５月14日付けで「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出があった。長野県教育委員会文化課と原村教育委員会で保護について６月13日に話合いを持った。極めて著名な大遺跡であるが、諏訪史以降は発掘調査されたことがないことから、その性格については不明瞭な点も多く、現時点では的確な保護措置は不可能なため、昭和62年度に国庫と県費から補助金交付をうけ「詳細分布調査」を実施し、その成果を保護に役立てていくこととする。

同年12月24日には、原村農業協同組合からライスセンターの建設概略図が呈示される。

昭和62年５月１日に、長野県教育委員会文化課・原村農業協同組合・原村役場農林課・原村教育委員会で「ライスセンター建設事業に係る埋蔵文化財保護協議」を行う。その席では、詳細分布調査の結果により再協議を実施し、保護措置を決定することとなる。

同年６月13日に「恩膳遺跡調査会」を発足させ、調査会には「恩膳遺跡調査指導委員会」と「恩膳遺跡調査団」を置き、調査は、調査指導委員会の指導のもとに、調査団が６月17日から７月１日に実施した。

2　発掘調査の経過

昭和62年６月３日　発掘準備をはじめる。

６月13日　恩膳遺跡調査会の発足と第１回調査会を開き、終了後、指導委員会を開く。

６月16日　調査団会議を開く。

６月17日　遺跡東側から表面採集をはじめる。遺物の発見は多い。

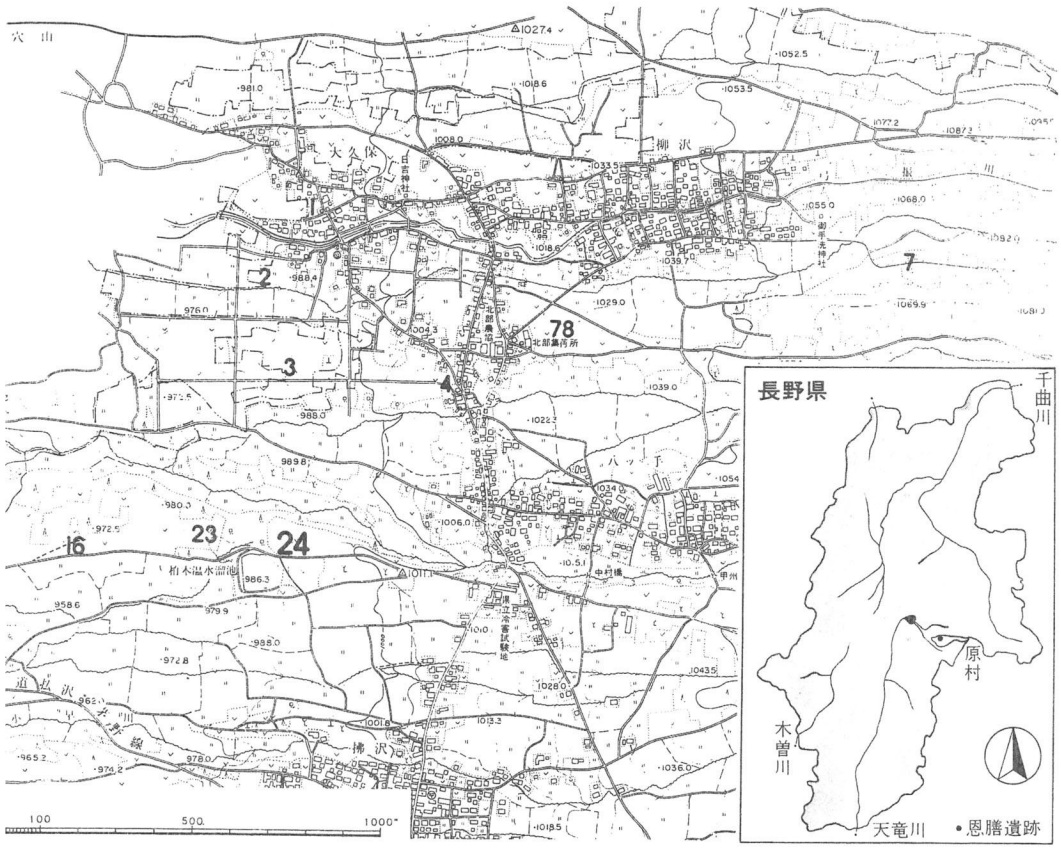
６月18日　テントの設営後、昨日に引き続き表面採集を行い、今日からボーリング調査をはじめる。午後には、グリッド設定を行いトレンチ発掘もはじめる。遺物の発見は極めて多い。

６月19日　現地で調査団会議を開く。Ａトレンチで配石遺構の一部を検出し、全体を把握するため付近を拡張する。Ｂトレンチでは住居址の埋没が考えられ、やはり付近を拡張する。

６月21日　引き続きボーリング調査・トレンチ発掘、Ａ・Ｂトレンチの拡張と遺構検出を行う。遺物の発見は多い。

恩膳遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	先土器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	家裏	○				○						○			昭和59年発掘調査
2	大久保前											○			消滅
3	向尾根	○	○			○									昭和54年発掘調査
4	横道下					○						○	○		昭和54年発掘調査
5	柳沢					○	○								地点不明
6	前尾根								○						地点不明
7	前沢					○									昭和63年発掘予定
16	恩膳南											○			
23	恩膳西			○		○						○			昭和62年発掘調査
24	**恩膳**			○		○	○					○			昭和62年発掘調査
78	弓振日向	○				○	○								昭和60・61年発掘調査



恩膳遺跡の位置と付近の遺跡（１：20,000）

6月22日　今日から検出遺構の記録と実測をはじめる。

6月24日　調査団会議を開く。

6月25日　埋めもどしを残し作業は終了する。

6月29日　第2回調査会を開く。終了後保護協議を行う。

6月30日　トレンチの埋めもどしをはじめる。

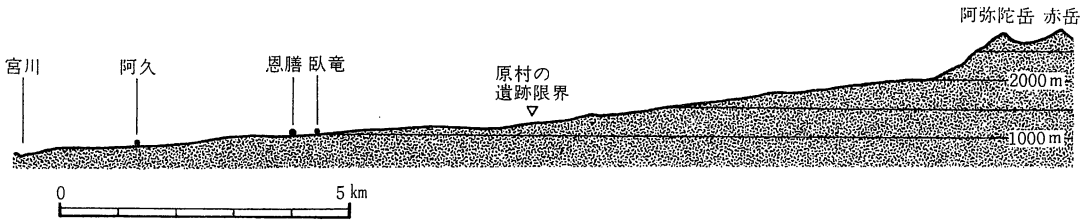
7月1日　トレンチの埋めもどしと機材の撤去・片付けを行う。

3　遺跡の立地環境

恩膳遺跡は長野県諏訪郡原村八ツ手地区の西方に位置している。先に触れた『諏訪史　第1巻』及びその後に採集されたいくつかの遺物からすると、恩膳遺跡は配石遺構群を伴う縄文中期から後期にかけての大規模な集落（あるいは祭祀）遺跡であることがうかがえる。この遺跡のある原村は、峻険な八ケ岳の連峰を東壁に構え、その広大な西麓の裾野に東西に細長く延び広がっている。その地形は、阿弥陀岳（2,806m）を頂点とした標高1,600m以上の急峻な山岳地帯、標高1,200mまで続くなだらかな山林・原野地帯、そして西にゆるやかな傾斜をもって広がる標高1,000m前後の平坦な台地からなっている。この台地には、傾斜方向に並行して大小の幾筋もの小河川が走っており、それらはなだらかに傾斜する平坦な台地を浸触し、開析して、東西方向に細長い尾根状の地形を残しながら、諏訪湖に通じる宮川へと注がれていく。恩膳遺跡は前沢川と小早川とによって開析されたこのような尾根上に立地している。その標高は1,000m前後を測る。遺跡の広がる地域の地目は殆どが畑であるが、その南斜面側は既に一部が土地改良のため削平されてしまっている。

原村には、この恩膳遺跡をはじめとする著名な数多くの縄文時代の遺跡が分布している。これらの遺跡の原村での高度限界は標高1,200mを前後するラインである。標高900mの尾根の先端には縄文前期の阿久遺跡があり、恩膳遺跡の上方1.3km程の地点には縄文中期の臥竜遺跡（標高1,050m）が位置している。なお恩膳遺跡のすぐ西隣には恩膳西遺跡があり、本調査後に原村教育委員会によって発掘調査されたが、そこでは顕著な遺構は確認されなかった。

原村域をはじめとする八ケ岳西南麓の地域は、縄文時代の生活領域と集団の定住性・移動性と



原村域の地形断面模式図（赤岳―恩膳遺跡―宮川ライン）

の研究においても格好のフィールドとして多くの研究者の注目を集めてきた。本調査を契機に、恩膳遺跡を含む周辺の遺跡群の地形的かつ社会的な立地環境を明らかにすることにより、このような研究テーマにもさらに具体的に取り組めるであろう。

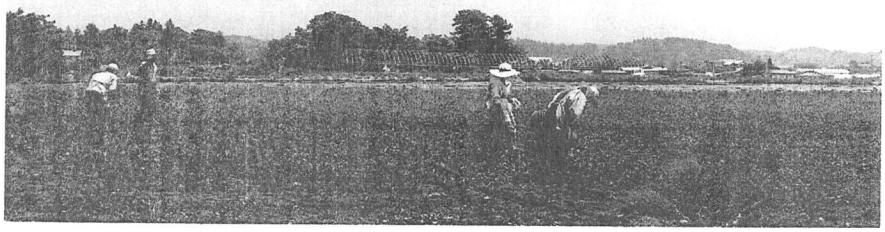
4　調査方法と成果

(1)　分布調査――遺跡のひろがりと遺物の集中区域

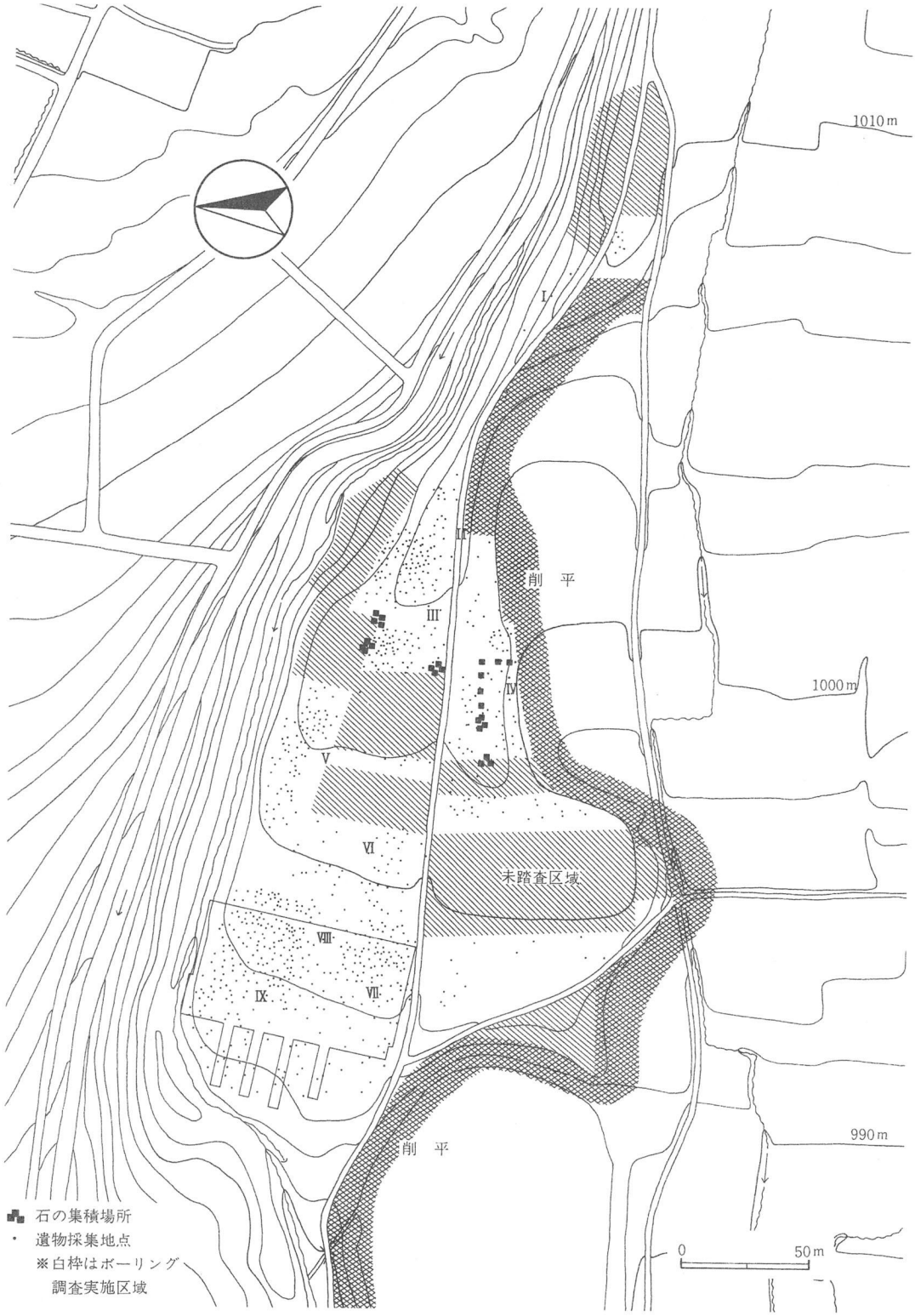
分布調査は周知の遺跡の範囲とその周辺とを対象とし、地表面に散在する遺物を採集してその地点を地図上に記録するものである。これによって遺跡のひろがりと形成期間との概要を知ることができる。

分布調査の結果、周知の恩膳遺跡の範囲の全体から遺物を採集することができた他に、遺跡の東側では新たに縄文時代早期の押型文土器を発見することができた。そして遺跡の全体からは遺物の特に集中する場所を9か所確認した（遺物集中区Ⅰ～Ⅸ）。その内訳は縄文時代早期1、同中期7、同後期1である。そのうちライスセンター他建設予定地には3か所（中期2、後期1）の遺物の集中区域がある。早期から中期、そして後期へと遺跡の中心が尾根の先端の方に向かって移動したことが窺かがえる。また遺跡の中央部にはかなり大きい規模の配石遺構群のあることが予測される。

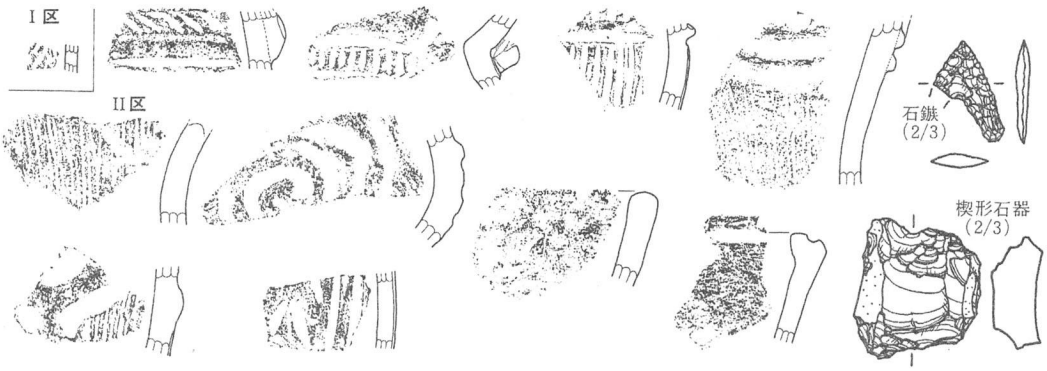
尚、第1図で遺物の分布が極端に少ないか、または無い所は作物が一面に植えてあったり、ビニールハウスがあるために踏査ができなかった所である。これらの場所にも遺跡のひろがり、遺物の集中区域の存在が当然予測される。遺跡の中央の南側（恩膳日向）は耕地整理によって、地表面が削平されている。その結果遺物は採集できなかった。しかし旧地形は十分に保たれており、恩膳遺跡の立地を考えるうえで重要である。遺跡の西側は現在林でる。そのために十分な分布調査はできなかったが、遺跡の全体の状況や地形を考慮することにより、遺跡のひろがりの西側の限界はここまで延びていると考えられる。



分布調査風景

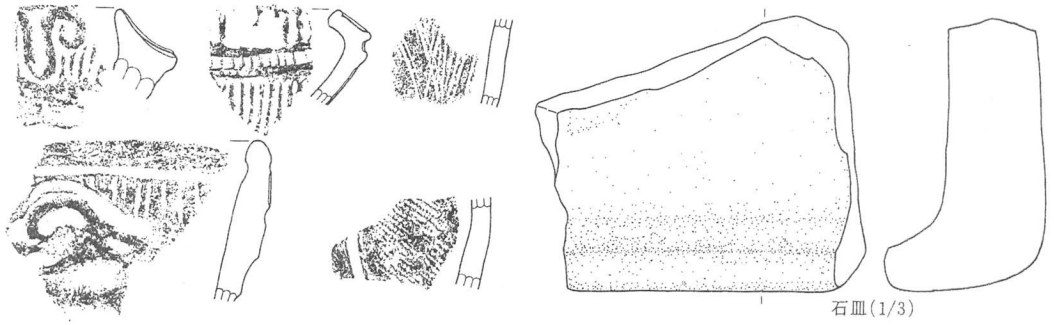


第1図　分布調査成果図（1：2,500）



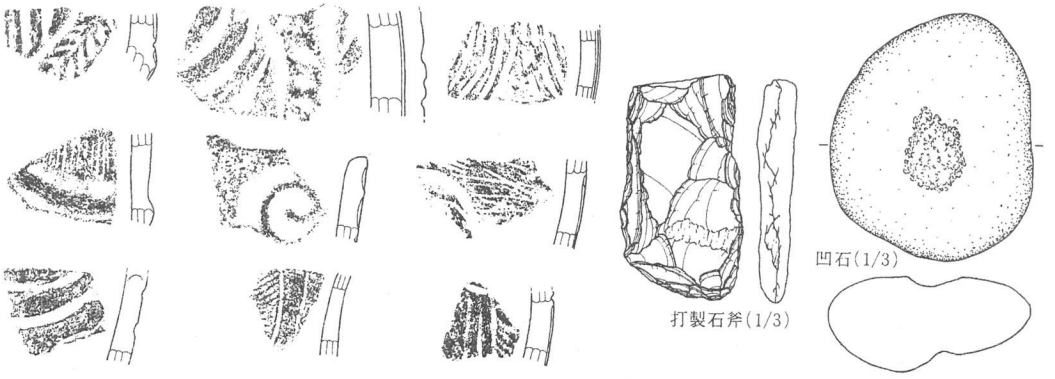
遺物集中区Ⅰ・Ⅱ

Ⅰ区では山形文と楕円文との押型文土器片が採集された。採集点数は少ないが縄文早期の遺物集中区として認定しておく。Ⅱ区では縄文中期後半の土器片が主体をなすが、後期のものも少量加わる。石鏃、楔形石器などの石器も同時期のものと思われる。この他に平安時代の灰釉破片も1点採集された。採集遺物数240点。



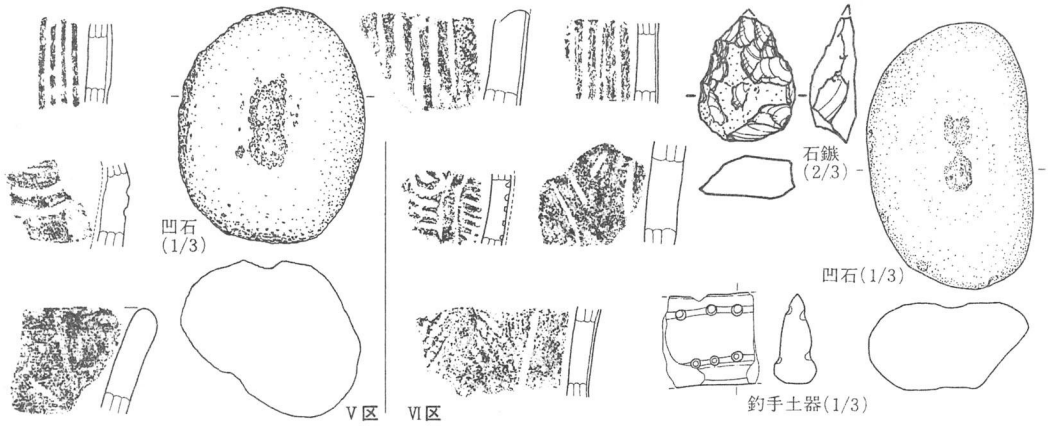
遺物集中区Ⅲ

縄文中期の後半の土器片が主体をなす。畑区画の周辺につくられた石の集積場所からは縄文後期の石皿が採集された。採集遺物数165点。



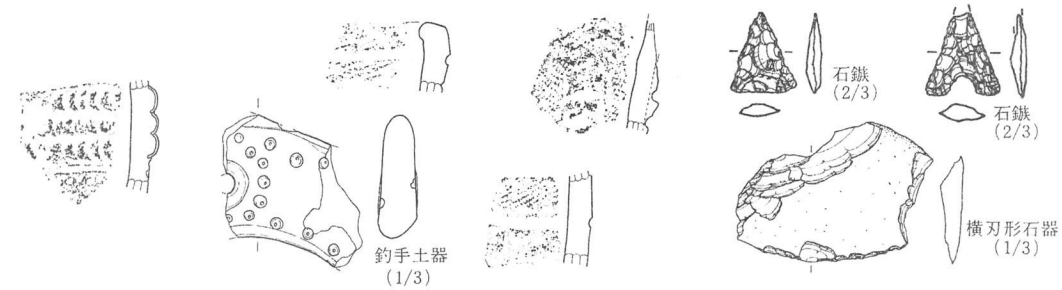
遺物集中区Ⅳ

縄文中期の後半の土器片が多く、後期の土器片も少量であるが採集された。同時期の石器としては打製石斧1点、凹石3点がある。他に平安時代の灰釉破片も1点採集された。採集遺物数159点。



遺物集中区V・VI

V区では縄文中期の後半の土器片が目立つ。採集遺物数130点。VI区でも同様に縄文中期の土器片が顕著であるが、中期末から後期初頭にかけての時期の釣手土器も採集されている。採集遺物数319点。



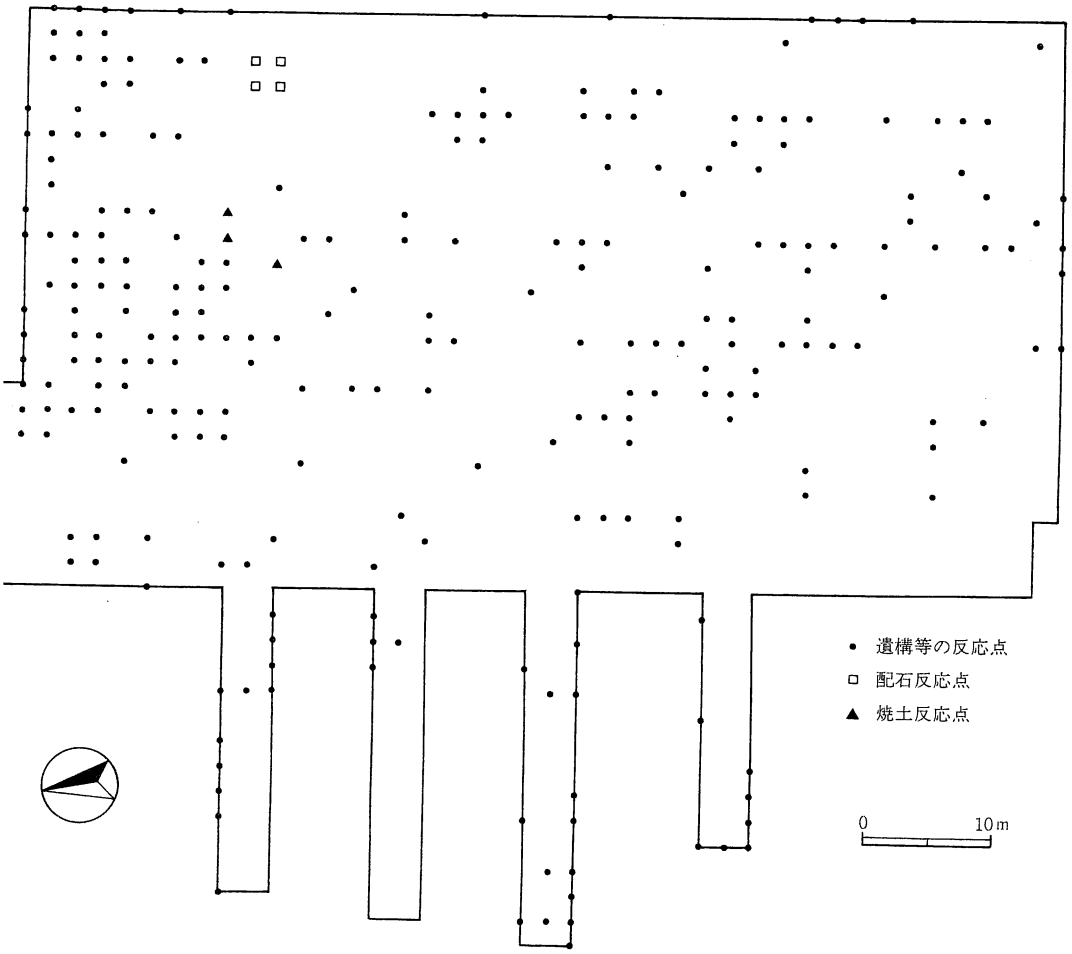
遺物集中区VII・VIII・IX

VII・VIII・IXの3区では縄文中期後半から後期前半にかけての多量の土器片が採集された。石器も石鏃8点をはじめ、横刃形石器や打製石斧などが採集されている。特にVII・IX区では縄文中期後半の土器片が集中し、VIII区では後期前半の土器片が顕著である。採集遺物数2,292点。

ボーリング調査風景

(2) ボーリング調査――配石遺構と住居址群との確認

ボーリング調査はボーリングステッキ（先端に切込み溝のある鋼鉄棒）を地中に差込み、土層の堆積の状況をはじめとして配石遺構、住居址等の存在を確認するものである。ライスセンター他建設予定地では2ｍ間隔でボーリングを行い、住居址等の遺構がどのように展開するのかを調べた。この組織的なボーリング調査の結果、配石遺構1基と住居址群とが存在することが明らかになった。配石遺構1基と住居址群とのひろがりが、先の分布調査で確認することができた遺物の集中区域とかなり重なり合う点が注目される。ただし、ここに確認した遺構等の反応点のいくつかが最近の機械耕作による溝跡などであることは、ボーリング調査中にもある程度予測できた。このことが明らかになるのは次の試掘調査によってである。そこで第2図のボーリング調査成果図には遺構等の反応点の全てを記すことにする。



第2図　ボーリング調査成果図（白枠はボーリング調査実施区域）１：600

(3) 試掘調査——遺構の確認とその性格の把握

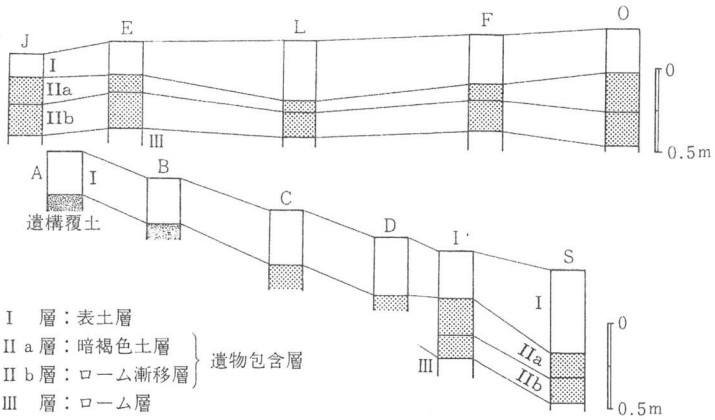
ボーリング調査だけでは遺構の存在を確実に把握することは難しい。そこで試掘による遺構の確認調査が必要となる。これは耕作土を含む表土層までを掘り抜き、そこでの土の色や締り、また土器片などの遺物の出土状況を観察して、住居址等の遺構の存在を調べるものである。

分布調査、ボーリング調査の結果に基づき、住居址をはじめとする各種の遺構群の遺跡でのひろがりと性格とを明らかにするためにライスセンター他建設予定地にA～Uの21か所の試掘区を設けた。試掘の結果、縄文時代後期前葉の配石遺構と中期から後期にわたる住居址群、小竪穴群の在り方を知ることができた。住居址、小竪穴は数基のものが重複し合い、また配石遺構の下にも数基の住居址が重なり合い、かなり複雑な状況を呈している。その全容を第3図に示す。

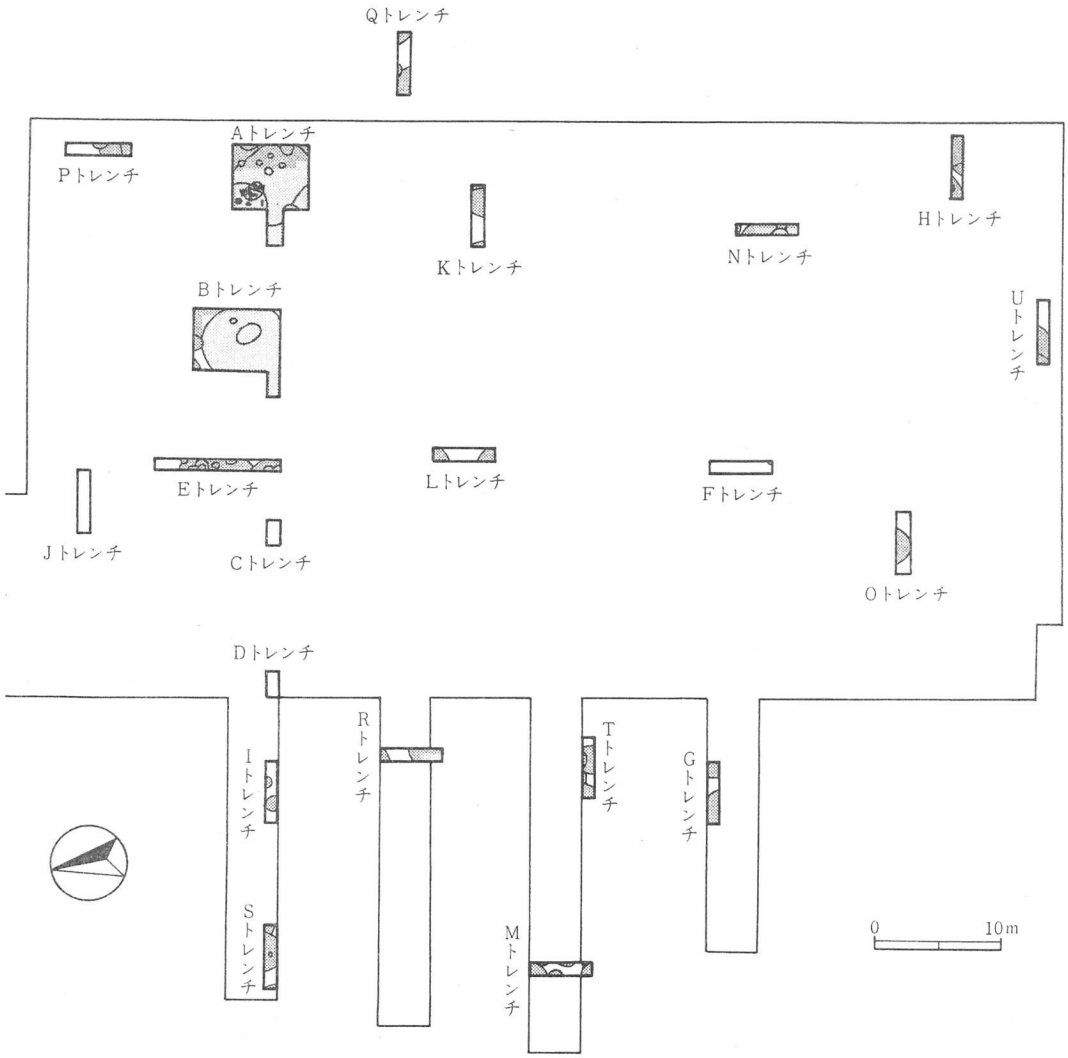
ボーリング調査及び試掘調査の結果、ライスセンター他建設予定地では全体にわたって地表面下40～50cmに縄文時代の遺物包含層が約20～40cmの厚さで堆積していることが明らかになった。縄文時代の遺物包含層の上面は耕作によって一部削平されているものの、全体としては比較的良好な保存状態である。また遺跡の地形に関しては後世の土地改良で大きく変えられたという痕跡も認められなかった。

さらに分布調査で明らかになった遺物の集中区域とボーリング調査及び試掘調査で検出された遺構群とが重なり合う事実からも、遺跡が全体にわたって比較的良好な状態で保存されていることが窺かがえる。

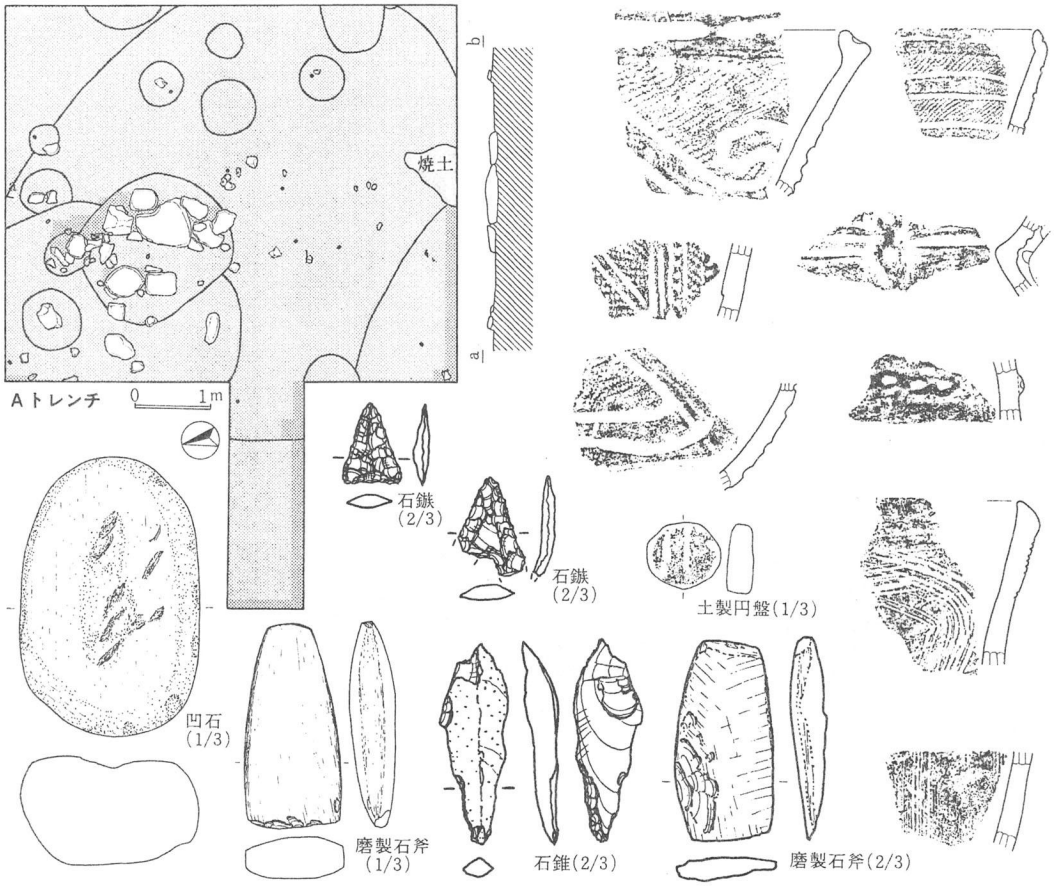
試掘調査風景



土層堆積模式図
（J－O南北ライン、
A－S東西ライン）

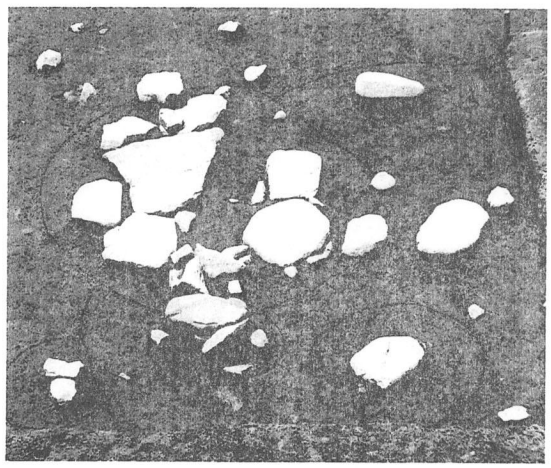


第３図　試掘調査成果図（網部は遺構推定箇所）１：600

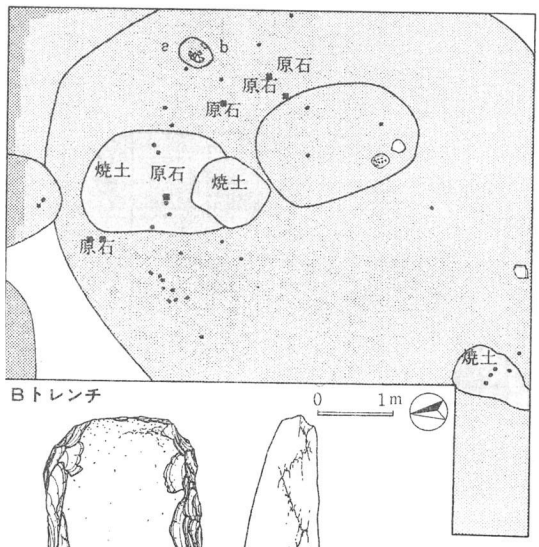


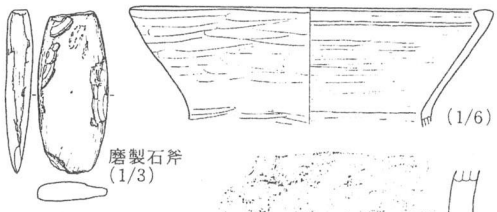
A トレンチ

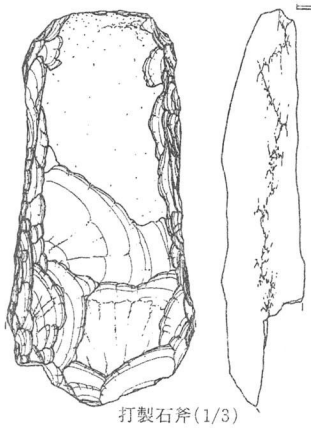
縄文後期の配石遺構1基と中期後半から後期前葉にかけての住居址相当遺構5基、小竪穴13基と時期不明の焼土1か所とが確認された。複数の住居址相当遺構と小竪穴とが重複しあい、Aトレンチ内では地山を確認することができない。配石遺構は耕作によって一部が抜き取られているためにか、その配置に明確な規則性は読み取れない。ボーリング調査の結果からはAトレンチの外にさらに広くこの配石遺構が展開することはないようだ。出土遺物のうち土器としては後期前葉のものが最も多く、中期後半がこれに次ぐ。石器も磨製石斧、石鏃、石錐、凹石などとバラエティーに富む。103点の黒曜石剥片も出土している。

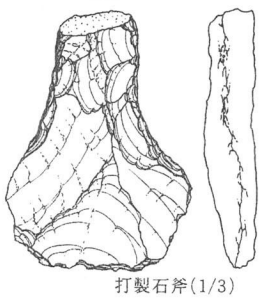


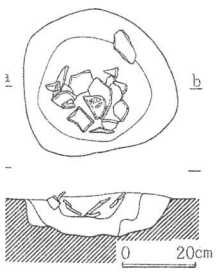
Aトレンチ配石遺構（北側から）

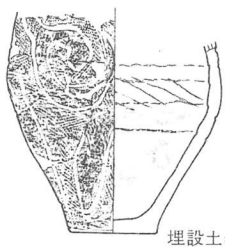






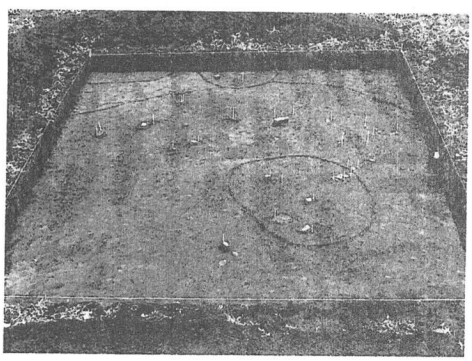




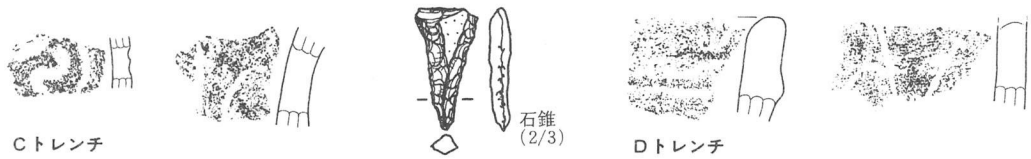


3 トレンチ

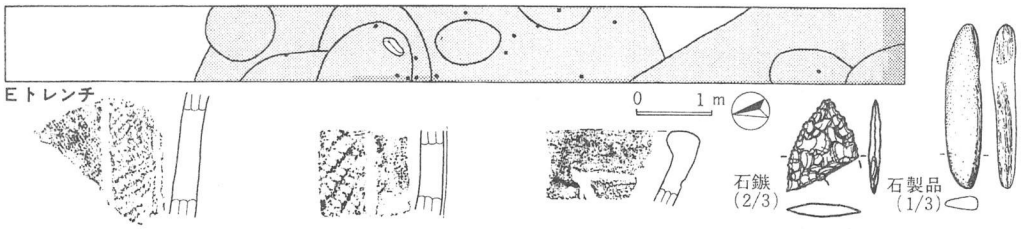
縄文後期前葉を中心とした住居址相当遺構3基、小竪穴4基（内1基は土器埋設小竪穴）と2か所の焼土が確認された。Bトレンチの中央で確認された住居址相当遺構は2から3基の重複したものと考えられるが、この確認面ではその重複の状態は明確には捉えられなかった。2か所の焼土はこの重複する住居址相当遺構の覆土中（あるいは上）で形成されたものである。トレンチ中央部の焼土下10cm程のところには、さらに焼土の広がりがボーリングによって確められた。



Bトレンチ遺構群（南側から）

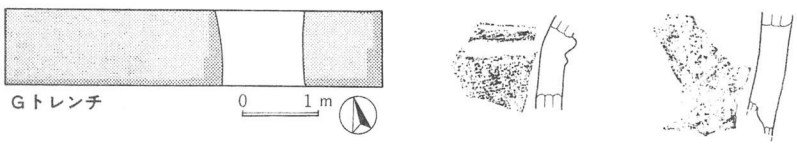


C・Dトレンチとも遺構は確認されていない。ともに縄文中期後半の土器片が出土する。



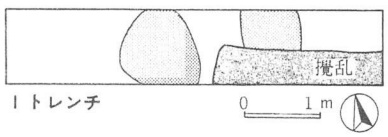
Eトレンチでは2基の住居址相当遺構と8基の小竪穴とが確認された。遺物の出土も多く、土器片は縄文中期後半から後期初頭が中心である。

Fトレンチではわずかに1基の小竪穴が確認されただけである。土器片の出土は意外と多く、縄文中期後半がその主体をなす。

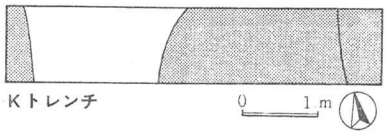


Gトレンチでは2基の住居址相当遺構が確認された。ともに良好な保存状態であるようだ。遺物の出土はかえって少なく、少量の縄文中期の土器片が出土しただけである。

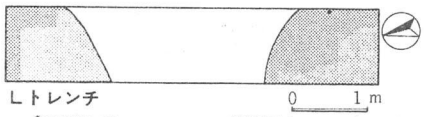
Hトレンチでは3基の住居址相当遺構と1基の小竪穴とが確認された。縄文中期後半の土器片が主体をなし、後期前半のものも見られる。

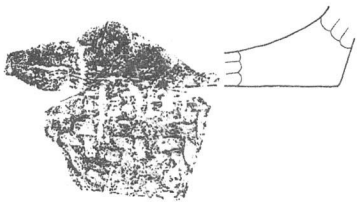


Iトレンチでは2基の小竪穴が確認された。縄文中期末葉から後期前半にかけての土器片が出土した。

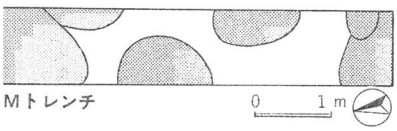


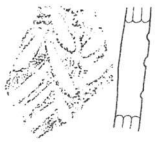
Kトレンチでは3基の住居址相当遺構が確認された。出土遺物はあまり多くないが、そのなかには縄文後期の土器片がある。



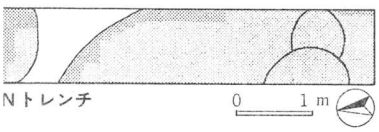


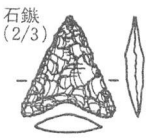
Lトレンチでは2基の住居址相当遺構が確認された。ともに良好な保存状態である。南側の住居址相当遺構の覆土確認面からは縄文中期末葉の土器片が出土している。



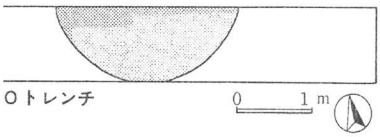


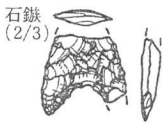
Mトレンチでは6基の小竪穴が確認された。縄文中期末葉と後期との土器片が少量づつ出土している。



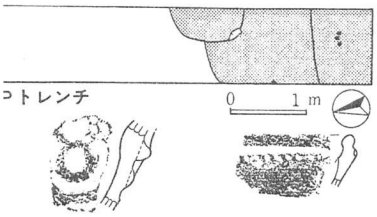


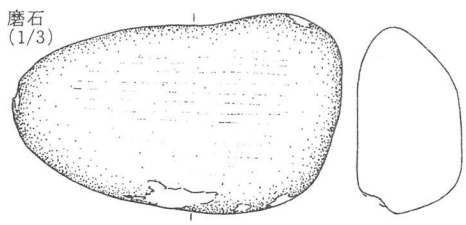
Nトレンチでは1基の住居址相当遺構と3基の小竪穴とが確認された。縄文後期前半の土器片が出土している。石器としては石鏃の他、黒曜石の石核1点も出土している。



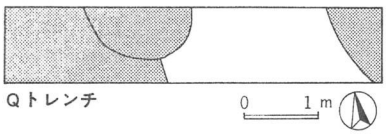


Oトレンチでは1基の大形小竪穴が確認された。縄文中期後半の土器片が主体をなす。

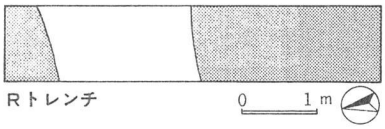




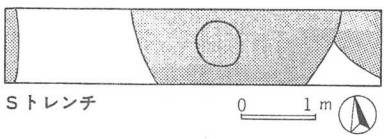
Pトレンチでは2基の住居址相当遺構と1基の小竪穴とが確認された。縄文後期前半の土器片が主体をなす。磨石、黒曜石の石核各1点、楔形石器2点が出土した。



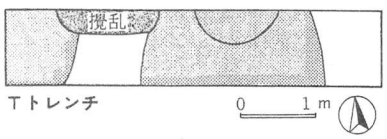
Qトレンチでは2基の住居址相当遺構と1基の小竪穴とが確認された縄文中期の土器片が出土している。

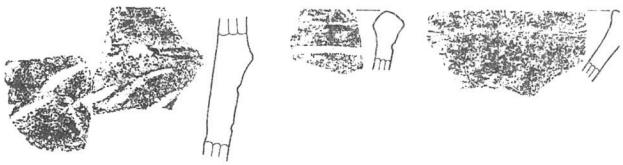


Rトレンチでは2基の住居址相当遺構が確認された。縄文中期から後期にかけての土器片が出土している。

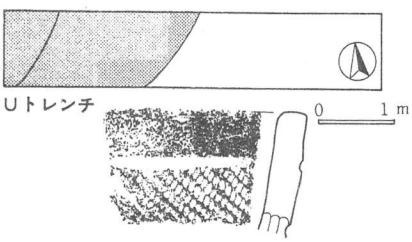


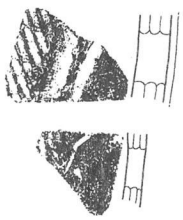
Sトレンチでは3基の住居址相当遺構と1基の小竪穴とが確認された。出土遺物は少ないが、縄文後期の土器片がわずかに見られる。

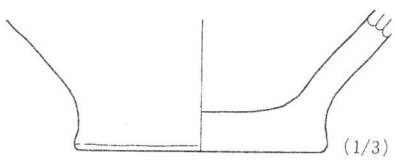




Tトレンチでは1基の住居址相当遺構と2基の小竪穴とが確認された。出土土器片は縄文中期から後期のものである。







Uトレンチでは2基の住居址相当遺構が確認された。出土土器片は多く、縄文中期後半から後期にかけてのものである。

遺構確認のための試掘調査では、33基の住居址相当遺構と44基の小竪穴とを確認することができた。各遺構の帰属時期を現段階では明確にしぼりこむことはできないが、試掘調査対象区の遺構群は全体として縄文時代中期後半から後期前半を中心とする時期のものであることはほぼ確実であろう。石器の出土も多く124点に及ぶ。また同区での配石遺構群の展開は顕著ではなく、むしろ遺跡中央部の遺物集中区Ⅲ～Ⅴに囲まれた範囲にその展開が予測される。

第4図　恩膳遺跡の範囲と遺物集中区Ⅰ～Ⅸ（1：2,500）

5 ま と め

—確認調査のあり方—

きわめてまれな例を除いて、現在、日本の国土で行われている発掘調査の大部分は、開発に先立ついわゆる「事前調査」である。

そのやり方は多くの場合、まず工事計画用地の範囲に遺跡がひっかかるかどうかが、行政の担当者によってチェックされる。広い面積の用地にわずかな試掘ピットがあけられたりして、遺構や遺物が確認されると、用地ぎりぎりの範囲について、費用や期間の協議が行われて、「記録保存」という発掘「事業」が開始される。なかには補助金（調査費）の額から発掘可能な面積を算定し、広い用地の中のごく一部を調査してお茶を濁すといったことも、最近ではしばしば見聞する。

そこにはもはや文化財保護も、学問としての考古学の研究もない。まさに開発の工事の一部としての、破壊に近い発掘があるだけである。

八ケ岳西南麓で最大級の縄文遺跡の一つと目される恩膳遺跡では、開発者（農協）と行政（県・村教委）と研究者（調査団）三者による、確認調査方法の慎重な検討が行われた。そして、①建設用地だけに限定されない遺跡全体の詳細分布調査。②用地とその周辺を中心としたボーリング、試掘を伴う遺構等の所在調査という、2段階にわたる徹底的な予備調査を行うことをきめたのである。

こうした2段階の予備調査にもとづいて、はじめて工事計画の可否と、本調査を行う場合の調査の方法・日程・費用などの資料が調査会に提出され、それぞれの立場からの卒直できびしい意見がたたかわされた。

その結果として、恩膳遺跡の一部を立地とする農協の施設は、全く別な場所に変更されることになり、遺跡は現状のまま残されることになった。それはどんな状況の下でも、遺跡をかけがえのない歴史遺産としてとらえ、予備調査といえども学問研究の重要な手段として位置づけて、真摯な努力を払った調査団の成果であると自負するとともに、県・村教委および原村農協関係者の、文化財に対する理解に根ざす勇気ある決断と英知の賜である。

今回開発からまぬがれた恩膳遺跡の、本格的な保存・活用の方策が、早急に検討されなければならない。

（調査団長　戸沢充則）

恩膳遺跡調査会名簿

（順不同）

恩膳遺跡調査会

顧　　問　菊池八五郎（原村長）　森山清元（原村議会議長）

会　　長　鎌倉　誉（原村教育委員長）

副 会 長　平林政視（原村助役）　牛山菊文（原村議会副議長）　秋山健樹（原村文化財調査委員長）

理　　事　平出圭史（原村議会議員）　中村平次郎（原村教育委員）　小林久男（同）　行田　力（同）　平林太尾（原村教育委員会教育長）　清水武治（原村文化財調査委員）　菊池長左衛門（村誌主任編纂専門員）　鎌倉千振（原村農業協同組合組合長理事）　伊藤高明（原村農業協同組合専務理事）　浜　　篤（長野県教育委員会事務局文化課長）　戸沢充則（明治大学文学部教授）　武藤雄六（井戸尻考古館館長）　宮坂光昭（諏訪市史編纂室）

恩膳遺跡調査指導委員会

委 員 長　戸沢充則（明治大学文学部教授）

委　　員　武藤雄六（井戸尻考古館館長）　宮坂光昭（諏訪市史編纂室）

恩膳遺跡調査団

団　　長　戸沢充則（明治大学文学部教授）

主任調査員　小杉　康（明治大学大学院）

調 査 員　武藤雄六（井戸尻考古館館長）　宮坂光昭（諏訪市史編纂室）　阿部芳郎（明治大学大学院）　小菅将夫（同）　鶴田典昭（同）　相馬生奈子（同）　平出一治（原村教育委員会）　伊藤　証（同）

調査参加者　菊池利光　田中文六　平林とし美　五味としゑ　小林静子　宮坂とし子　藤原智恵子　秋山きみゑ

恩膳遺跡調査会事務局

事務局長　平林太尾（原村教育委員会教育長）

事務局次長　行田竹輝（原村教育委員会教育次長）

事 務 局 員　武田伊都子　邊見茂子　佐貫正憲　平出一治　伊藤　証（原村教育委員会職員）

原村の埋蔵文化財10

恩　膳　遺　跡

昭和62年度詳細分布調査報告書

発行日　昭和63年３月22日

発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所　ミウラ企画書籍